Voice 25

# 地元力育てる暮らしを

ヨシオカ農園 代表 吉岡 龍一

## 本当の豊かさ考え「日本」を見つめる

近年、新規就農者はとても少なく、農家はどんどん減っています。ですが、農村は日本の美しい原風景であり、生産者にとっても消費者にとっても暮らしを支える大事な場所です。

地域の農家と一緒に農地を守り、人と人を結び付けながら、地域・社会を盛り上げる動きにしていきたい――。そんな思いで2012年に地元の千葉県柏市で始めた農業がきっかけとなり、今では飲食店の経営や、利用者がスペースを共有しながら独立した仕事を行うコワーキングスペースの運営も行っています。これらは分野の異なる事業ですが、いずれもその根底には、地域の人々が集い、交流する場を演出することで、地元の活性化につなげたいという思いがあります。

実は、私は大学4年次の冬まで、政治思想を勉強するために大学院に行くつもりでいました。卒業間近になって進学を辞め、農家への道を進むことを決めたのには、大学時代に参加した二つのNPOでの経験が影響しています。

大学3年次には「地球の友と歩む会」という環境系NPOの活動を手伝っており、その一環で南インドの農村を訪れました。村では、テレビなどの電化製品を持たない家庭が多く、現地の人々は「日本はすごい」と言って、日本の暮らしをうらやみました。しかし、現地の子どもの輝く笑顔や人々の幸せそうな様子を見るうちに、「今の日本の暮らしはそれほど誇れるものだろうか」と疑問に思うようになりました。日本を見つめ直す仕事がしたいと考えるようになったのはその時からです。

大学4年次には「アサザ基金」というNPO法人に、1年間インターンとして参加し、茨城県の中学校で環境教育に携わりました。使われなくなった学校近所の田んぼを耕して生徒たちと一緒にもち米を作り、収穫したもち米は、障害者の雇用に熱心な地域の企業と協力してせんべいに加工し、商品として販売しました。

このような活動の企画運営に携わる中で、次は自分で地元の柏市のためにプロジェクトを起こしたいと思うようになりました。そこで考えたのが、「物を作って世に出す」ということ。人が五感で感じることのできる物を使って、地域の人々に直接働き掛けたいと考え、農業にたどり着きました。

2012年から柏市が主催する1年間の就農プログラムに参加して、地域の農家で研修を受け、現在は、市の旧沼南町エリアにある鷲野谷という小さな集落で、「ヨシオカ農園」を営んでいます。

ヨシオカ農園では、CSA（Community Supported Agriculture）、つまり〝地域で育む農業〟という考え方を大切にしています。周辺の農家と協力し合うだけでなく、地元の消費者にも農業に関心を持ってもらい、みんなで農業を盛り上げていきたいと考え、農作業体験を受け入れているのです。農作業体験では、畑の除草作業や収穫を体験してもらうだけでなく、夜には畑で採れた野菜を使ってバーベキューもします。希望者は多く、平日は会社勤めの人が、週末の一時を自然の中で過ごすといった、心のゆとりを求めてやってくる人も少なくないようです。

ヨシオカ農園に農作業体験に来る参加者は若い世代が多い

## 地元力引き出すコミュニティー創造

同じく2012年から始めた「YOL Cafe Frosch（ヨル カフェ フロッシュ）」は、地元の友人2人と共同で立ち上げたレストランで、ヨシオカ農園の野菜を使った料理を提供しています。「交流」と「発信」をコンセプトとするこの店は、〝曜日限定店長〟が売りのコミュニティーカフェバーで、曜日ごとに店長を募集し、「飲食店をやってみたいけれど、今の仕事を辞めるなど生活を大きく変えることは難しい」という人たちの夢の実現を応援しています。

フロッシュでお客さんと談笑する吉岡さん（写真左）。「フロッシュ」はドイツ語でカエル。店長を"変える"、お客さんが店に"帰る"の意味合いが込められている

コワーキングスペースのNOBでワークショップに参加する利用者たち

フロッシュを訪れるお客さんの中には、デザイナーやクリエーターなども多く、店内スペースを使って展示会を開催することもあります。このように、ゲスト店長やお客さんなど、あらゆる人たちが交わる中で、地域に内在する可能性が具体的な活動として形になっていくのだと思います。

個人で仕事をするお客さんたちとの出会いは、新たな事業のアイデアにもつながりました。2013年から、さまざまな人々が集い、業種の壁を超えてコミュニケーションしながらノウハウを共有し、新しいアイデアを生みだす場として、「Noblesse Oblige（NOB：ノブレス・オブリージュ）」というコワーキングスペースを運営しています。この分野で事業を行うのは初めてだったので、当初は利用者との契約の結び方などルールやシステム作りに苦戦しましたが、利用者のニーズを取り入れながら、快適なコワーキングスペースづくりを目指しています。

都市近郊の柏市では、生活の場と職場が別々である職住分離型の暮らしが一般的ですが、地域を拠点とする新しい働き方を提案することで、NOBが「職」を通じて地元の活性化を実現する創造的な場になればと願っています。

これまで、「農業」という自分の直感を信じて突き進んできたことで、地域に内在する「地元力」を引き出す活動が少しずつ広がってきました。仕事や家庭など、いろいろな制約はあるかもしれませんが、もし挑戦できる状況にあるならば、ぜひ自分を信じて新しいことを始めてみてほしいと思います。

<Profile>
よしおか・りゅういち
1988年、千葉県松戸市出身。日本大学在学中にNPO法人アサザ基金で1年間環境保全を学ぶ。卒業後、地元の千葉県柏市で営農開始。また、EDGE HAUS.IIcのメンバーとして、"顔の見える、おかげさまサイズの地元"をコンセプトに柏市で街づくりも行う。